

2021 年度 森泰吉郎記念研究信仰基金 研究成果報告書

「見えない学びの場」を担う人々のエスノグラフィー

政策メディア研究科 修士課程 2 年

日下真緒

## 研究の概要

本研究は、既存の教育機関に分類されない学びの場で、教育を担う人々が果たしている意味や役割を明らかにすることを目的とする。そこで働く運営者と子どもたちとともに、「見えない学びの場」がいかに形成されてきたのか、また子どもたちにとっていかなる存在であるのかを、多声的ビジュアルエスノグラフィーの方法論をベースに理解する。

## 目次

1. 研究の背景
2. 研究の目的
3. 研究の方法
4. 2021 年度の実施内容と森泰吉郎記念研究振興基金の使途
5. 研究の成果と課題

### 1. 研究の背景

大阪府に、子どもたちが勉強するために集う場所、「宇宙っ子クラブ」がある。

「宇宙っ子クラブ」は、小学校や中学校からほど近い、ある人の自宅に位置している。子どもたちは、インターホンを押さずに、その家の玄関のドアをあける。本来リビングであるはずの場所には、長机がところ狭しと並び、その周りをホワイトボードやプリンターが囲む。学校帰りの子どもたちが、そこに「ハロー」と言いながら入って、各々学校の宿題をしたり、受験勉強をしたりする。冷蔵庫を開けてジュースを飲んだり、コタツに入って勉強したりする子もいる。学年ごとに指定の曜日や授業があるものの、いつでも出入りできるようになっているため、平日休日問わず、多くの子どもたちがそこで時間を過ごしている。

子どもたちは、その場所を、家主であるレモンさんの名前をとって、「レモンさんち」と呼ぶ。正式な名前は「宇宙っ子クラブ」であるが、その雰囲気や運営スタイルから「クラブ」や「学習塾」とは呼び難く、近所の人や親たちからも、「レモンさんち」という呼び名で親しまれてきた。民家で運営される「宇宙っ子クラブ」には、その存在を知らせる看板や広告はない。しかし、20年続くこの場所では、これまで100人近くの子どもがロコミで集い、育ってきた。

筆者もそこで育ったうちの1人である。筆者は幼少期から高校に上がるまでのほぼ毎日を過ごした。筆者が中学、高校と成長していくにつれて、他の同級生が学ぶ環境を知り、「宇宙っ子クラブ」が一般的な学習塾ではないことに気づいていった。年齢的に他者との差が気になるなかでも、家族以外の近い人がいて、学習塾のように息苦しさがない「宇宙っ子クラブ」は一般的な場所ではないが、筆者にとっては大切な場所だった。

同時に、中学、高校といった偏差値や学力が重視される教育システムに適応してくなかで、個が重要視されないという居心地の悪さも常にあった。この経験から、大学に入り、個を重視することを理念とする教育系のアルバイトに就いたものの、居心地の悪さは払拭できなかった。商業的な目的性は当然存在するものではあるが、それ自体が居心地の悪さの根幹となっていた。子ども本人が望んでいなくても、親が望む対応やプログラムをもとに、サービスとして提案し、客単価をあげてノルマを達成しなければならなかった。

この居心地の悪さの原因を考えるなかで、筆者自身の過去の経験を振り返ると、勉強一辺倒ではないが勉強はしていたり、全体のなかにもいながらも個として動いていた実感があり、また、商業的な雰囲気を感じずに過ごしたことに思い至った。それらは全て「宇宙っ子クラブ」で得た経験や実感であった。

個人的な意見ではあるが、「宇宙っ子クラブ」での経験は、筆者にとって幸運かつ得難いものであったと感じる。しかし、今になって思うと、「宇宙っ子クラブ」に対する疑問はたくさんある。どのようにしてこの場所が運営されているのだろうか。運営者や子どもたちにとって、この場所はどのような存在なのか。改めて自分にとって通い続けた場所を調査対象地として、エスノグラフィーを用いた教育に付随する環境やコミュニティに関する研究を着想するに至った。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は大きく分けて2つある。1つ目は、「宇宙っ子クラブ」に着目し、どのような存在として子どもたちに集われているのかを明らかにすることである。

教育社会学者の西田（1999）の研究では、「教育をめぐる当事者による意味づけと行動の理解を目指す教育研究は、現実を説明し、課題の発見を可能にする」と主張されている。そのことから「宇宙っ子クラブ」をめぐる当事者に焦点を当てることが重要である。本研究では、「宇宙っ子クラブ」の運営者3人を対象として、その場所を担う人々の意味世界を明らかにする。また彼らの意味世界の探索を通じて、彼らが存在することとなった背景にある問題や、引き受けている社会的な課題を検討する。

2つ目の目的は、「宇宙っ子クラブ」を調査研究する枠組みを検討することである。先述した通り、筆者は過去に「宇宙っ子クラブ」に所属していた背景がありながら、本研究においては調査者の立場にある。かつて調査対象地に所属していた元内部者として、一方的に現場を解釈することなく、「宇宙っ子クラブ」を調査する方法を検討する。

### 3. 研究の方法

調査のプロセスは、「ビジュアルエスノグラフィー」をベースに採用する。ビジュアルエスノグラフィーは、写真や動画を用いて現実を解釈し、調査協力者とともに映像作品にまとめる、エスノグラフィーの方法論である（Pink, 2020）。

ビジュアルエスノグラフィーの方法論の1つに、「多声的ビジュアルエスノグラフィー」がある。「多声的ビジュアルエスノグラフィー」は、文化人類学者トービンが、「客観的」と称されてきたエスノグラフィーの方法論において、1つの国、場所のなかの異なる見識を捉えるために、研究者がフィールドを撮影した映像を中心に媒介して、フィールド内外の様々な人の多声（Multi-vocal⇨異なる見方）を重ね合わせた民族的記述をする。主に、教育学の分野で実践されている方法である（Tobin, 1989）。

本研究の調査協力者は、「宇宙っ子クラブ」を運営する3名である。世代もバックグラウンドも違う彼らと、「宇宙っ子クラブ」でどのような経験をし、どのような役割を果たしているのかを、言葉だけで協働的に理解することは難しい。そのため、本研究は、多声的ビジュアルエスノグラフィーの方法論に用いることで、映像を通じて、1つの場所に所属する複数の協力者による「声」を理解する。

### 4. 2021年度の実施内容と森泰吉郎記念研究振興基金の使途

新型コロナウイルス感染拡大の影響で、研究計画時の予定から変更があった点もあるが、対面でのインタビューやワークショップをオンラインに切り替えるなどして研究を進めた。調査のためのオンライン環境整備と事例研究、文献資料、書籍の購入調査

を行うために使用した。また、映像作品を制作するために必要な撮影機材を購入し、「宇宙っ子クラブ」での生活記録を捉えるビジュアルデータを作成した。

## 5. 研究成果と課題

本研究では、社会のあり方とともに日々変容する「宇宙っ子クラブ」を理解するため、多声的ビジュアルエスノグラフィーを基にした調査の成果を、1つの映像作品としてまとめた。

元内部者である筆者が調査者となり、再び「宇宙っ子クラブ」を調査対象地として戻ってきて、運営者から語られたのは、この場所が「見えない」ということだった。そして、「見えない」場所とはいかなるものなのかについて、筆者の1年間の調査活動を通じて、運営者やそこに通う子どもたちとともに、協働的に理解することを目指した。「宇宙っ子クラブ」は、どのようにして始まったのか。なぜ運営者はこの場所を続けてきたのか。また、子どもたちにとって運営者たちはどのような存在なのか。それらの研究課題を明らかにするために、ワークショップやインタビュー、ビデオ撮影を通じて「宇宙っ子クラブ」を担う人々の意味世界に着目し、運営者とともに作品として映像にまとめる作業を行った。その結果、「見えない学びの場」としての「宇宙っ子クラブ」の存在を明らかにした。

本研究の学術的成果として、子どもたちとの生活記録を生成するワークショップの結果を基に、運営者とのインタビューをするという研究アプローチの提案が挙げられる。本研究では、教育現場のエスノグラフィックな研究において課題であった、子どもたちの意味世界を見ることを目指した。言葉で意味付けを表現しにくい子どもが外部者である筆者とともに非言語的な手がかりを採取し、それを内部にいる大人たちが見ることによって、子どもたちの意味世界を掘り下げる試みであった。また、この試みは、子ども側だけでなく、運営者たちが「宇宙っ子クラブ」をどのように意味付けているのかを理解することにも役立った。子どもたちが採取した非言語的な情報は、運営者が言語化するための、重要な役割を果たしていたと言える。映像作品には筆者と運営者の視点のみならず、子どもたちの視点も取り入れながら、それぞれの立場から見た「見えない学びの場」を表す方法の確立につながったのではないかと考える。

また、新型コロナウイルスの感染拡大に伴って、エスノグラフィーを実践する研究が困難に直面していることは、既に指摘されている。こうした状況下で、本研究アプローチを通じて、映像制作に関わるなかから協力者とともに研究対象地の可能性を見いだすことは有効であったと考える。

一方で、研究倫理的な問題を含んでいたため、子どもたち自身が配慮されないといけない対象にあったことや、調査者が外部の人間だったことから、表層しか捉えられていない可能性がある。そのため、本研究アプローチにおいてさらなる検討が必要である。

## 謝辞

この度は、2021年度森泰吉郎記念研究振興基金に採択いただき、ありがとうございました。新型コロナウイルス感染拡大の影響で、対面での調査が厳しい状況下にありましたが、ご支援いただいたおかげで、研究活動を進める中で必要となる機材や書籍を購入し、こうして論文の執筆と映像制作を完遂することができました。心より感謝申し上げます。この度ご支援いただきました森泰吉郎記念研究信仰基金に携わる全ての皆様に、心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

## 参考文献

- Tobin J. (1989). Visual anthropology and multivocal ethnography: A dialogical approach to Japanese preschool class size. *Dialectical Anthropology*, 13, 173-187. .
- Sarah Pink. (2020). 'Doing Visual Ethnography 4th edition'.
- 志水 宏吉, 藤田 英典, 西田 芳正, 古賀 正義, 箕浦 康子. (1999). 『教育のエスノグラフィー』 嗟峨野書院.